

子どもからおとなまで愛される プリンセスフルーツいちご栽培への挑戦 田中いちご園

市民 パルタージ

このコーナーは、市内在住の市民編集委員が市内の主要な施設を巡って、清瀬のまちの特徴を紹介します。



市民編集委員

高橋玲子さん
(上清戸在住・会社員)
Myブーム=かりんとう



市内で唯一いちご園を営んでいる「田中いちご園」

清瀬市といえば、出荷量がダントツ1位で、東京都全体の40%以上を占める「ニンジン」のイメージが強くありますが、「いちご」も栽培されていることをご存じですか。新小金井街道の途中に「いちご」と書かれたのぼりと連なるビニールハウス。足を止めて、その前にある直売所をのぞいてみると、ありました！ 大きく、真っ赤に熟したいちごのパックが、並べられています。



手探りで始まったいちごの施設園芸

12月初旬から5月頃まで続くいちごの販売。「毎年初めての収穫時はとても嬉しいですし、今年も始まったんだな」とい気がします」と話されるのは、いちご園を営む田中忠雄さん。今回は市内で唯一、いちごの栽培に挑戦している「田中いちご園」をご紹介します。

手探り状態からのスタート



今回お話しいただいた田中さん

田中さんがいちご栽培を始めたのは、今から10年ほど前。サラリーマンを辞めて実家の農業を継ぐにあたり、冬場でも収穫可能な「施設園芸」(※1)で、幅広い世代から愛される魅力的な果物「いちご」を栽培することを決意しました。

そこで、まず施設園芸に関する情報やノウハウを学ぶとともに、東京都からの助成を受けるため、「きよせ施設園芸研究会」(※2)に加盟しました。しかし、いちごを本格的に栽培している方が市内にはいなく、都内にも多くありません。「どのような機械や農具を使用するのが良いのか」「収穫量を上げるにはどうすれば良いのか」など、情報を求めて、都内でいちご園を営んでいる方を調べることから始めたそうです。

現在では、練馬区・世田谷区・西東京市・東久留米市・調布市・武蔵村山市などのいちご園の方とのネットワークができ、「一期一

会(いちごいちご会」と名付けられた集まりで、情報交換をしなが

ら栽培に勤しんでいます。

※1 温室やビニールハウスなどといった

※2 市内の農業生産者が集まり、平成14年に設立した団体。より安全な農作物を安定して生産できるように、施設栽培や新しい品種・農業資材の導入など、さまざまな栽培技術の研究を行っている。

いちごは「苗作り」が要

いちごは、種をまいて育てるのではなく、「ランナー」と呼ばれるツルを育てて植え付け、実を付けさせます。

田中いちご園では、3月に親苗を定植(植え付け)します。4月には親苗からランナーが出て、その先端に収穫用の子苗ができていきます。1つの親苗から30本ほどのランナーが発生するそうです。ポットに定植させたランナー上の子苗を7〜8月までかけて育てます。9月中旬には、子苗をビニールハウス内に定植させますが、「このタイミングが最も大切です」と田中さん。なぜなら、花の元となる花芽が分化(形成)されていることが重要だからです。

花芽が分化されているかどうかは、いちごの根茎部分であるクラウンを切つて、「顕微鏡」で確認するそうです。花芽が分化されていない場合は、定植をもう少し待ちますが、収穫時期が遅れてしまうことにもなるので、肥料を与えないか、低温処理を行い温度を下げるといった「花芽分化促進処理」を行います。田中いちご園では、肥料を与えない方法をとっていますが、田中さんは「肥料を切るタイミングを誤ると栄養不足に

なり、通常4〜5回ある開花が1回だけになり、収穫量が落ちてしまいますので、見極めは慎重に行っています」と話されました。

病害虫管理は 実が付く前に！

9月中旬に定植した苗は、12月の初旬頃に収穫ができるようになります。この間、大きな実を採るために肥料と水は毎日欠かせません。基本的には機械で管理している、温度もビニールハウス内が10度以下になるとヒーターが入り、28度になると換気のために自動で窓が開く仕組みになっています。

また、受粉にはミツバチを使っていますが、餌として砂糖水を与える時に刺されてしまうこともありますが、十分な注意が必要になります。

いちごは病害虫の被害に遭いやすく、ダニやアブラムシといった害虫や、カビやうどんこ病などの病気にも対策が必要です。田中いちご園では、ダニには天敵資材など、農薬以外の対策もしています。「農薬を使う時も実を付ける前に行くなど、病害虫管理は、とにかく早く行うことが重要です」と田中さん。

家庭で育てる場合のコツを伺ったところ、プランターで2本くらい育てるのが適当で、ポイントは「毎日の水と肥料」と「温度を10度以下にしないよう温かいところで育てること」の2つだそうです。



収穫の時期を迎えるいちご

今後はいちご狩りも

こうして、さまざまな困難を乗り越え、無事に収穫できた時には、毎年このころながら大きな喜びと安堵に包まれます。いちごは、年によって多少違いはありますが、5月下旬頃まで収穫でき、その間販売も行っています。

現在は、ビニールハウス前の直売以外に、JA東京みらいの「みらい清瀬新鮮館」での販売や、朝市に出すこともあり、贈答用の箱も用意しています。清瀬のいちごはとて好評で、数量に限界があるのが残念なほどです。

来年は、市民からの要望も多い「いちご狩り」ができるよう、専用ハウスを設けたり、現在の「とちおとめ」だけでなく、いちご狩りに適した「紅ほっぺ」「あきひめ」などの品種の栽培に挑戦したりと準備を進めているそうです。

「いちご狩りを通じて、市民交流ができれば」と田中さんは話されます。ベビーカー・車いすでも体験できるようなハウスで、幼稚園・保育園児や小・中学生の農業体験、老人ホームからの訪問などを受け入れられるようにしたいと



栽培されている「とちおとめ」

「市場に近い清瀬市は、地方に比べて立地条件にも恵まれているので、農業の可能性が大きく、優秀な先輩方が培ってきた知恵を生かして、今後も面白い農業ができるのではないかと思います」と田中さん。市内では若い世代も順調に育っており、最近では新しいシステムを取り入れた農業にも取り組もうとしています。「農業は、その地域に根付いた伝統であり、文化です。これからも市民の皆さんに愛される農業を続けていきたいです」と力強く話されました。

取材を終えて

お土産に購入した清瀬のいちごは、とにかく大粒で甘く、娘たちもにっこり。新鮮な野菜や果物を畑の直売で購入できる「農のある風景」清瀬市に住んでいることを改めてうれしく思いました。

問合せ 田中いちご園 ☎080・2047・4469